



物語文 海のいのち ②



名前

月 日

次の文章を読み、あとの問いに答えましょう。

でしになって何年もたったある朝、いつものように同じ瀬に漁に出た太一に向かって、与吉よきちいさはふつと声をもらした。そのころには与吉いさは船に乗ってこそきたが、作業はほとんど太一がやるようになっていた。

「自分で気づかないだろうが、おまえは村一番の漁師だよ。太一、ここはおまえの海だ。」

船に乗らなくなった与吉いさの家に、太一は漁から帰ると毎日魚を届けに行った。真夏のある日、与吉いさは暑いのに毛布をのどまでかけてねむっていた。太一は全てをさとした。

「海に帰りましたか。与吉いさ、心から感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」

悲しみがふき上がってきたが、今の太一は自然な気持ちで顔の前に両手を合わせる事ができた。父がそうであったように、与吉いさも海に帰っていったのだ。

ある日、母はこんなふうに言っていた。

「おまえが、おとうの死んだ瀬にもぐると、いつ言いたすかと思うと、わたしは D 夜もねむれないよ。おまえの心の中が見えるように。」

太一は、あらしさえもはね返すくつ強な若者わかものになっていたので。太一は、そのたくましい背中せなかに、母の悲しみさえも背負おうとしていたのである。

(立松 和平 『新しい国語六』 東京書籍)

フアイト!!



(1) だれが、だれのでしなのですか。

だれが

が

だれの

のでし

(2) ふつと声をもらしたの様子にあたるものに○をつけましょう。

() 特に言おうという気持ちではないが、
つい大きな声が出た。

() ぜひ言おうという気持ちで、小さい声
で伝えた。

() 特に言おうという気持ちではないが、
自然と声が出た。

(3) Bは、どんなことを表していますか。

(4) Bが表していることを言いかえている表現を
文中から八字で書きぬきましょう。

与吉いさも

た

(5) 悲しみがふき上がってきたの意味にあたるもの
に○をつけましょう。

() 悲しみがふきとんだ。

() 悲しみの気持ちが激しくわいてきた。

() 悲しみの気持ちが少しずつわいてきた。

(6) Dにあてはまる言葉を選び、○をつけましょう。

() おそろしくて

() わくわくして

() たくましくて